番外一　「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」吉崎・福井紀行（一）

■ 吉崎御坊を訪ねる

二〇一一年（平成二三年）に、コンピュータ化学会秋季年会が福井市で開催されたので、参加かたがた吉崎御坊を訪ねました。二十年ほど前に東尋坊を訪ねたときに、時間の都合で吉崎御坊に寄れなかったので、今回はぜひと計画しました。神奈川県から新幹線とＪＲを乗り継いで芦原温泉駅に着いたのが午前十時過ぎ。バスの便が悪いので、タクシーで「吉崎御坊跡」に向かいました。

■ 嫁威の伝説

途中に、嫁威という地名があります。蓮如上人の威徳を称揚する嫁威伝説の舞台になったところで、岐阜県養老町の室原文楽「蓮如上人一代記嫁威の場」や佐渡の人形浄瑠璃「嫁威肉付面」のもとになりました。八幡神社の鳥居脇に、旧金津町商工会が立てた説明板「嫁おどし谷」があるので、写真を載せます。

後述する吉崎御坊願慶寺に件の面が残っています。そのあらすじは、

嫁威肉附面縁起　（願慶寺）

文明年中（一四七〇年頃）に、蓮如上人が吉崎に滞在されていたころの話。近くの十楽村の農民に与三次というものがあり、その妻清と子供二人、母親と暮らしていたが、与三次と子供二人が病気で相ついで亡くなった。清は悲嘆にくれ、未来はこのような苦しみのない浄土で共に楽しみを受けようと、蓮如上人に帰依して、昼は百姓仕事をこなしながら、夜毎に吉崎へ詣でた。これが姑には気に入らず、なんとか吉崎参りをやめさせようと画策したがかなわず、最後には、先祖代々伝えてきた鬼の面をかぶって、途中の人気のない恐ろしげな谷で待ち伏せして威そうと考えた。そうとは知らず、清は念仏を唱えながら、この谷を通りかかったところに、鬼の面をか

嫁威谷の説明板

ぶった姑が白山神社の使いと称して白装束で突然に踊りでる。清は、恐ろしかったが、日ごろ念仏に帰依している身、「食べるなら食べてみよ。金剛の他力の信は決して食べられない」といい、念仏を唱えながら通り過ぎ、吉崎に参った。姑は家に戻り、鬼の面をはずそうとしたが、顔の皮に張り付いてとれない。嫁にあわす顔がないと、自害しようとするが手足がしびれて動かない。そうこうするうちに、嫁の清が戻ってきて、事の次第を聞き、「どんなものも阿弥陀仏を頼み念仏を唱えれば仏になる」と蓮如上人から伺っているので、ぜひに念仏なさいと姑に勧める。姑も、はじめて嫁のいうことを聞き、念仏を唱えると面はすぐさまに落ち、手足ももとに戻った。さしもの姑も改悔の心を起こして、吉崎へ参り、嫁姑ともに熱心な信者となった。件の面は、蓮如上人に差し上げたが、のちに願慶寺の開基祐念坊に下賜されて、この願慶寺に残った。現場の谷は、嫁威谷と名づけて後世への誡とした。

念仏の教えを広めるために、よくできた話。「係累が三人も亡くなるという、どうしようもない不幸」、「嫁・姑の確執」、「異界の鬼」、「貴人による奇跡」、「地名譚」など、講話に最適な要素を兼ね備えています。

ところで、ごくごく近くの吉崎御坊吉崎寺にも別の肉付面が残っています。吉崎寺は浄土真宗本願寺派で、願慶寺は真宗大谷派です。どちらの派でも、念仏を広めるためには、このような講話の好材料が必要だったのでしょう。

地酒に「嫁おどし」という酒があるときき、吉崎御坊跡の御山を下ったあとで、醸造元の古鍛治屋・吉田酒店の店を訪ねました。ちょうど休みらしくシャッターが下りており、入手できなかったのは残念です。ただし、無収穫というわけではなく、醸造樽を模した味のある看板が目につきましたので、写真を載せましょう。

銘酒「嫁おどし」

吉崎御坊付近略図

■　吉崎御坊跡

タクシーで吉崎御坊跡の駐車場に着くと、「御山（おやま）」と呼ばれる小高い丘の上で、遊歩道が整備されたこじんまりした広場が広がっています。タクシーを帰すと、ほかに人影は見えず、寂しいかぎり。有名な観光地のように、混雑しても興ざめですが、一人きりというのも調子がでないもの。この広場の周辺部には、石の柵で囲んだ遺物や石碑が、説明板とともに配置されています。説明板は比較的新しいけれども、墨の色が消えかかっているところがあり、どうも最近は手を入れていないようです。

広場の南側、中央近くに、本堂跡を示す石碑が立っています。先頭部分がよく読めないが、角書（つのがき）になっているようで、無理やりに判読すると、「蓮如上人御在世本堂跡」と彫ってあるように見えます。

吉崎御坊本堂跡の碑

吉崎御坊のはじめは、蓮如上人が文明三年〔一四七一〕に、天台宗延暦寺の迫害を逃れて、滋賀県大津から移ってきたときです。ときに、蓮如上人五十七歳。この間の事情は、蓮如上人が文明五年〔一四七三〕九月に発した御ふみ（第一帖八）によってうかがうことができます。次に、少しだけ引用しましょう。

文明弟三、初夏上旬のころより、江州志賀郡大津、三井寺南別所辺より、なにとなく、不図しのびいでて、越前・加賀、諸所を経回せしめをはりぬ。よて、当国細呂宜郷内、吉崎といふこの在所、すぐれておもしろ

きあいだ、年来虎狼のすみかなれしこの山中をひきたいらげて、七月 廿七日よりかたのごとく一宇を建立して、昨日今日とすぎゆくほどに、はや三年の春秋はをくりけり。（後略）

『御ふみ』、蓮如、文明・明応期〔一四七〇年頃〕
東洋文庫三四五『御ふみ』出雲路修 校注、平凡社、一九七八

三井寺南別所とは、三井寺（園城寺）の庇護のもとに建立した顕証寺のこと。「よて」は「よって」の小書きの「っ」を省いた表記。現代語訳を示しておきましょう。

（現代語訳）
文明三年〔一四七一〕、初夏（四月）上旬のころから、近江の国志賀郡大津の三井寺南別所（顕証寺）から、とりたてて用もなく、急に逃れでて、越前・加賀のいろいろな場所をめぐり歩いて来た。その果てに、この国の細呂木の郷のうち、吉崎という在所が、景色がよく興味を引いたので、これまでずっと虎や狼がすむようなところであったこの山中を切り開いて、一宇を建立して、昨日今日と過ごして、はや三年の年月を送って来た。（後略）

このあと、吉崎へ信者が集まることを禁じた文面が続き、加賀の守護である富樫政親などから敵視されることを回避しようとしています。蓮如が吉崎を退去したのは文明七年〔一四七五〕ですから、吉崎滞在はわずか四年ですが、この間吉崎には、多屋（参詣信者の宿泊所）などが立ち並び、寺内町が形成され、おおいに発展しました。

吉崎の発展の有様は、文明五年〔一四七三〕八月十二日付御ふみ（第一帖七）にも記されています。吉崎の繁盛のうわさを聞き、「女性の身で信心するとはどのようなことかを知りたい」として、吉崎に詣でた女性連れが述べたことの伝聞です。

（前略）そもそもこのころ吉崎の山上に、一宇の坊舎をたてられて、言語道断おもしろき在所かな、とまうし候。なかにも、ことに、加賀・越中・能登・越後・信濃・出羽・奥州、七ケ国より、かの門下中、この当山へ、道俗男女、参詣をいたし、群集せしむるよし、そのきこえかくれなし。これ、末代の不思議なり。ただごととともおぼえはんべらず。（後略）

『御ふみ』、蓮如、文明・明応期〔一四七〇年頃〕
東洋文庫三四五『御ふみ』出雲路修 校注、平凡社、一九七八

（現代語訳）
そもそも、このごろ吉崎の山上に一宇の寺を建立されましたが、ことばで言いあらわせないほどすばらしい場所であるとうわさされています。なかでも、加賀・越中・能登・越後・信濃・出羽・奥州の七カ国から、門下のものみな、僧・俗・男・女を問わず、この寺へ参詣し、集まっているというのは、ひろく世間に知られたことです。これは、末世の不思議で、ただごととともおもえません。

御ふみ（第一帖七）では、このうしろに、女性の往生についても、男性とへだてがないとする文章が続き、「一向に弥陀をたのみまいらせて、ふたごころなく、一念に、わが往生は如来のかたより御たすけあり、と信じたてまつりて、」念仏を唱えることが勧められています。女性も往生できるという考えが、当時の女性にとって魅力だったのでしょう。嫁威の伝説も、登場人物が女性であることに意味があったといえます。

このような吉崎の発展が、富樫政親の警戒を呼び起こしたわけです。文明五年〔一四七三〕九月付の御ふみ（第一帖八）は、信者の突き上げと対地頭の板ばさみになった蓮如のきわどい舵取りが滲んだ文面です。富樫政親・幸千代の家督争い（文明六年〔一四七四〕）では、吉崎御坊によった蓮如は政親と同盟を結びます。家督争いに勝利した政親は、吉崎御坊の勢力が邪魔になり、結局は相対することになります。御ふみの文面でも察することができるように、蓮如の意向は政親と戦わずに穏便にというものでしたが、それを無視した下間蓮崇が信者をあおって、富樫政親と一戦を交えます。しかし、結果は敗戦。このままでは、戦乱が収まらないと、文明七年〔一四七五〕に蓮如上人が吉崎を退去します。信頼していた従者の下間蓮崇が自分の意向を無視したと考えた蓮如は、蓮崇を破門し、死の直前まで許しませんでした。

長享二年〔一四八八年〕に富樫政親が一揆側に討ち取られてから、蓮如の三人の息子（松岡寺住持蓮綱、光教寺住持蓮誓、本泉寺住持蓮悟）が加賀一国を実質支配しました。そののち、加賀の一向一揆による支配は、長享二年〔一四八八年〕頃～天正八年〔一五八〇〕。戦国時代を通じて、約百年間続いたわけです。

吉崎御坊本堂跡碑の東隣には、高村光雲作の蓮如上人像が直立しています。高さ五メートル余りの巨大な像で、周りを見回すように立っている様は、気力と体力がみなぎっているようにみえ、乱世を駆け抜けた偉丈夫はかくありなんと思えます。

蓮如上人像

吉崎御坊本堂跡碑の西隣には、「蓮如上人の腰かけ石」があります。吉崎御坊ができたときの絵図に、蓮如上人が石に腰をかけて、弟子二人とともに、対岸の鹿島のあたりの景色を眺めている図柄があり、その石が「蓮如上人の腰かけ石」として伝えられたものといわれています。少し離れて、「蓮如上人の御手植御花松」という、古い切り株が東屋をしつらえて展示してあります。

広場の東北隅に、本光坊了顕の墓が立っています。本光坊了顕は、文明六年〔一四七四〕に吉崎御坊が火災にあったときに、蓮如上人が机上に忘れた、親鸞聖人直筆の『教行信証』六巻のう

蓮如上人腰かけ石

蓮如上人御手植御花松

ち信の巻を、持ち出すために火中に入った人物。火中に入ったものの、猛火で持ち出せぬのを悟って、割腹して腹の中に収めて守り、そのまま焼死したと伝えられています。説明板によれば、西本願寺に残る『教行信証』信の巻がそれで、「腹ごもりの聖教」と呼ばれています。御山をおりた北側、春日神社の近くに、「本光坊旧地」の碑が立っています。

■　加賀千代女の吉崎紀行

「蓮如上人の御手植御花松」と「本光坊了顕の墓」に挟まれた位置に、加賀千代女のすみれ草の句碑「うつむゐた處か臺や菫草」があります。

本光坊了顕の墓

本光坊旧地の碑

すみれ草の句は、千代女の『吉崎紀行』に載っていて、宝暦一二年〔一七六二〕、六十歳のときに吉崎まで旅したときの作です。皆森禮子『江戸期おんな考』第十号、「加賀千代女「吉崎紀行」の足跡を追って」、一〇三～一一〇（一九九九）に、金沢市立図書館蔵の『吉崎紀行』の全文（中本恕堂による）が収録されています。詞書とともに「すみれ草」の句を次に引用します。

けふといふけふはじめて吉崎もふでける。その嬉しさ
有りかたさのあまり、まづ御場より拝したてまつりて

うつむいた所（とこ）が台（うてな）やすみれ草　　千代

『吉崎紀行』宝暦一二年〔一七六二〕

御場は「ごじょう」と読むのでしょうか。浄土真宗の特別な用語かとおもい調べてみましたが、具体的なことは不明。あるいは、「道場」のことかとも推測できます。崩し方によっては、「場」

加賀千代女のすみれ草の句碑

と「坊」は似てきますので、もしかしたら「御坊」のことかもしれませんが、千代女の頃には、「吉崎御坊」とは、呼ばれていなかったようです。なお、願慶寺パンフレットの詞書は、次のようになっています。

けふといふけふはじめて吉崎の御忌にもうでける
　嬉しさ有難のあまりまず御院に拝したてまつりて

季題は「すみれ草」で春。「阿弥陀仏の尊像を拝んでうつむくと、ちょうどそこが尊像の台座で、かたわらの鉢にすみれ草が植わっていた」という情景でしょうか。鉢が台の上においてあったのかもしれない。あるいは、「山上の吉崎御坊の碑を拝んでうつむくと、碑の台座のかたわらに、すみれ草がひそやかに咲いていた」というのでしょうか。

加賀千代女（松任千代女、元禄一六年〔一七〇三〕～安永四年〔一七七五〕）については、『近世畸人伝』（伴蒿蹊、寛政二年〔一七九〇〕）に記載があり、「句のさますべて女流の趣ありてつよからず」と評しています。

朝がほや地にさくことをあぶながり　千　代
あさがおにつるべとられてもらひ水　千　代

『近世畸人伝』は、国際日本文化研究センターのサイトでディジタル化したものをみることができます。

http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/kijinden.html

御山からの眺望は、『御ふみ』の時代から五五〇年近く経っても変わらず、今も絶品です。写真でみるように、北潟湖に鹿島の森が影を落とし、その向こうに日本海が見えます。

ここからの眺望をめでたとおぼしき句が『吉崎紀行』に載っています。

鹿鳥
うぐいすのどちらが鳴くぞ水の影　千　代

「すみれ草」の碑のかたわらの説明板によると、詞書は「山上より鹿島の森をながめ」となっているとあります。このほうが、山上からの実景（写真で示したような景色）を見た上で作句していることを、より的確に示しています。

つまり、実景をみた上で判断すると、多分次のような意味になるでしょう。「鹿島の森が、北潟湖に映っている。鶯の声が、実際の鹿島の森から聞こえるのか、湖に映った森から聞こえてくるのかわからないほど、湖面が静かで見とれるほどの景色だ。」この解釈が正しいとすると、視覚での見事さを、聴覚におきかえた趣向が、意外性を生んでいると言えます。

吉崎御坊跡の御山より鹿島を望む

鹿島の森から狭い水路（石川県と福井県の県境で、大聖寺川に通じ、すぐに日本海に注ぎます）を隔てた対岸は、浜坂の集落で、丘を隔てて日本海に通じています。この丘は現在はゴルフ場になっていますが、日本海側の松林の中に、歌枕として有名な「汐越の松」があります。筆者は時間がなくて、汐越の松を訪ねることができなかったので残念だったのですが、千代女の『吉崎紀行』にも、次の句が載っています。

汐越をみやりて

汐越の松や小蝶は中もどり　千代

とりあえず、「湖を渡って、歌枕で有名な汐越の松にゆく途中で、小さな蝶が力尽きてもどってきた。同様に、吉崎を訪ねるのが精一杯で、西行・芭蕉の跡を訪ねられないのは残念」と解釈しておきましょう。千代女も、芭蕉翁が訪ねた跡をしのんで、渡し舟で対岸に渡りたかったのでしょうか。同じく汐越の松を訪ねられなかったといっても、千代女なら小蝶にたとえられるでしょうが、太めの筆者は何者にもたとえようがありません。

■　願慶寺、東別院、西別院

吉崎御坊跡の広場の北端に、「吉崎御坊跡」の標柱が立っています。通常の参詣とは逆に、ここから参道を下ります。あわら市コミューニティバスを利用する場合には、バスの停留所から登りますので、逆に標柱の立っているところが参道の終点です。

参道を下る途中で、雉とおぼしき鳥が二羽、斜面から突然に飛び立ちました。その日は、それまでに誰も登る人がいなかったのでしょう。白い雉なら吉兆ですが、色は白ではなかったのは確かです。参道は、願慶寺の前を経て、東別院（真宗大谷派吉崎別院）と西別院（浄土真宗本願寺派吉崎別院）の間を通る狭い階段で、参道を下りきったところには、「旧御本堂跡登り道」の道標が立っています。この参道は、吉崎御坊の創建当時から、この位置にこのままの形であったことが、当時の絵図からわかります。

通常の順路の登り口に下りたところで、仕切りなおし。まず、「旧

吉崎御坊跡の標柱

吉崎御坊登り口

御本堂跡登り道」の道標のところから、参道を登って突き当たると、そこが願慶寺です。この寺には、冒頭で紹介した「嫁威肉付面（よめおどしにくつきのめん）」と称する鬼面が残っています。この願慶寺は、真宗大谷派に属しており、地続きで、東別院にゆけます。

太鼓楼の立つ建物は、宝物館となっていて、そこには、毎年の蓮如上人御影（ごえい）道中の際に使われる輿が展示してあります。御影道中とは、毎年蓮如忌に、四月一七日より四月二三日までを費やして、蓮如上人の画幅（御影）をリヤカーにしつらえた駕籠に乗せて、京都の東本願寺から琵琶湖西岸を経て吉崎まで徒歩で運び（御下向）、東別院で十日間の御忌法要をおこなうという行事です。宝暦二年〔一七五二〕に始まり、今年で三二五回目。この蓮如上人御影は、もともと願慶寺に伝わったのを本山の東本願寺

願慶寺

東別院

に納めたもので、この行事はいわば里帰りにあたります。吉崎に着いた御影は、宝物殿にある輿に移し替えて、東別院の本堂まで担ぎ上げられます。法要のあと、帰路（御上洛）は琵琶湖東岸を経由して、京都まで戻ります。

「旧御本堂跡登り道」をはさんで西側には西別院（浄土真宗本願寺派吉崎別院）があります。写真は、西別院の東門を間近かに撮ったものと、東別院の北門を左に入れて撮ったものです。本堂は、寛政九年〔一七九七〕に再建されたもの。本堂内は、極彩色の彫刻で飾られ、「慧光常照」の扁額を掲げた中央に本尊の阿弥陀如来が安置されています。

駐車場に面した北門は、念力門と称して、あわら市指定建造物。西本願寺にあった豊臣秀吉寄進の門を、昭和二四年〔一九四

西別院

西別院（正面奥）と東別院（左）

九）に京都から荷車で人力で運び、移築したものです。駐車場に停まったあわら市コミューニティバスも写しておきました。なお、ここは、ＪＲ芦原温泉駅行のバスが出る停留所で、ＪＲ大聖寺駅行のバスの停留所は、すこし離れた石川県側にあります。

バス停の時刻表で、バスが一二時五二分に出発することを確かめてから（なにしろバスの本数が少なく、タクシーもありません）、蓮如上人記念館に向かいました。ここは、平成一〇年より本願寺文化興隆財団が経営しており、展示室である蓮如館・七不思議館とそれを取り巻く庭園からなりたっています。庭園は、北潟湖の湖畔を占めていて、鹿島の森が間近かに見られます。

閑話休題。記念館の内容とは関係のないことですが、本願寺文化興隆財団（パンフレットには旧名の本願寺維持財団と記載）と

西別院北門（念力門）

駐車場に停車中のバス

真宗大谷派や浄土真宗本願寺派との関係がわかりにくく、とまどいました。どうも、吉崎の蓮如上人の旧跡に、拠点をもつということが浄土真宗の各派にとって、ステイタスシンボルであるようです。

■　芭蕉と吉崎

芭蕉がおくのほそ道の旅で吉崎を訪れたのは、元禄二年〔一六八九〕八月上旬のことでした。西行の歌で知られる歌枕の汐越（しほこし）の松を訪ねるためです。『おくのほそ道』から、該当の箇所を次に引用します。

蓮如上人記念館の庭より鹿島を望む

越前の境、吉崎の入江を船を棹して、汐越の松を尋ぬ。

終宵嵐に波をはこばせて
月をたれたる汐越の松　　西行

此一首にて数景尽たり。もし一弁を加るものは、無用の指を立るがごとし。

『おくのほそ道』芭蕉、元禄一五年〔一七〇二〕
『芭蕉奥おくのほそ道』萩原恭男校注、岩波文庫、岩波書店（一九九一）

（現代語訳）

越前との国境、吉崎の入江を船で渡って、歌枕の汐越の松を訪ねた。西行の歌に、「一晩中、嵐が吹いて波が松にかかり、松の葉に垂れた水滴に月が映っている。汐越の松とはよくいったものだ」とある。この一首で、どんな景色も言い尽くされている。このうえ一言加えるのは、役に立たない六本目の指を加えるのに等しいことだ。

ただし、蓑笠庵梨一の『奥細道菅菰抄』（右記岩波文庫に併録）には、「この歌は、西行のものではなく、吉崎近辺では、蓮如上人の作だと伝えられている」と記されています。

ところで、芭蕉が西行の歌を引くだけで、汐越の松を題材に俳句を作らなかったのは不思議なことです。なにか裏があるのではないかと思うのは、スリラー小説の読みすぎでしょうか。

そこで、念のため『おくのほそ道』を読み直してみました。秋田の象潟を訪ねた箇所に、

秋田にかよふ道遥に、海北にかまえて、浪打入る所を汐こしと云。

とあって、さらに、象潟を松島に比べて説明したあと、次の俳句が続きます。

象潟や雨に西施がねぶの花　　芭蕉

汐越や鶴はぎぬれて海涼し　芭蕉

『おくのほそ道』芭蕉、元禄一五年〔一七〇二〕

『芭蕉奥おくのほそ道』萩原恭男校注、岩波文庫、岩波書店（一九九一）

「西施」は、中国春秋時代に呉王夫差に国を傾けさせた美人。「鶴はぎ」は鶴脛。「汐越」は、『奥細道菅菰抄』によると、「日本海から、象潟へ、汐の行き来する川で、汐越橋という橋が架かっていて、両岸の集落を汐越町といい、秋田への往還の宿場町である」と解説されています。現在は、にかほ市象潟町一丁目塩越～五丁目塩越、大塩越などとして、その名を留めています。『菅菰抄』では、さらに続けて、「汐越町の庄官のもとに芭蕉直筆の

腰たけや鶴はぎぬれて海涼し　芭蕉

と揮毫した短冊が残り、汐越川にあった「腰だけ」（「腰丈」または「腰長」）の浅瀬を詠み込んだものと言い伝えている」と、注釈しています（今も、腰丈橋が象潟町にあるそうです）。また、『曾良日記』に付随している俳諧書留（『芭蕉奥おくのほそ道』萩原恭男校注、岩波文庫に併録）の中にも、「腰長汐」と題して、初五文字が「腰たけや」となった句が収録されています。

要するに、芭蕉は、この「腰だけや」という初五文字を「汐越や」に変えて、『おくのほそ道』に採用しているわけです。もとの句は、「腰」と「脛」、「竹」と「萩」が対応して、趣向としておもしろいにもかかわらず、変更したのはなぜか。

ここからは、推測に推測を重ねます。もともと「腰だけや」として、『おくのほそ道』を書きすすめて、吉崎の汐越の松まで来たときに、どうしても西行の歌を挿入したいので、自分の句を載せないという原稿を作ったと考えましょう。推敲の段になって、やはり「汐越の松」という歌枕を詠んだ句も挿入したくなったとしましょう。そこで、どうするか。

吉崎の項を、「無用の指を立るがごとし」と荘子を引いて格好良くきめたところは、そのままにしたい。読み直してみると、象潟の汐越で詠んだ「腰だけや」の句がある。この五文字を「汐越や」に変えれば、場所は違うが、歌枕の汐越を詠みこむことができる。松に鶴はつき物だから、まあ許される。

と、考えたのではないでしょうか。かくして、象潟の句のあとに汐越の句を配置した最終稿が完成したと。天才芭蕉の思考を、凡才がたどるのはおこがましいけれども、気ままな文章ゆえ、まあこのくらいの逸脱はゆるされるでしょう。ついでに、汐越の松を詠みこんで、芭蕉の句のパロディーを作ったのでご披露しましょう。

汐越の松萩濡れて月高し　艸蟲齋

月つながりで、西行の汐越の歌とも関連がつきました。芭蕉の市振での句に

一家に遊女も寐たり萩と月　芭蕉

とありますから、萩と月のつながりもついています。

芭蕉は、吉崎を訪ねたのに、吉崎御坊を訪ねていないのは、多分、宗派が違うというのがもっとも妥当なところでしょう。さらには、芭蕉が吉崎を経由して汐越の松を訪ねた元禄二年〔一六八九〕には、吉崎御坊が道場としてそれほど整備されていなかっ

たことも考えられます。一方、千代女が吉崎を訪ねた宝暦一二年〔一七六二〕には、今日「蓮如上人御影道中」と呼ばれる行事がすでに始まっていて（宝暦二年〔一七五二〕より）、千代女は真宗の信者でしたから、『吉崎紀行』はこれに参列するための旅行です。多分、吉崎が蓮如上人ゆかりの地として広く認知され始めたのはこのころだと考えられます。

『奥細道菅菰抄』では、吉崎を紹介して、次のように述べています。

吉崎は、大聖寺と細呂木の宿との間、往還より西なり。立花の茶店の傍を、西に入て、南へ行事十五町ばかり、加賀、越前の境にある人家にて、北を加賀吉崎と云、南を越前よしざきと云。（後略）

『奥細道菅菰抄』蓑笠庵梨一、安永七年〔一七七八〕

『芭蕉奥おくのほそ道』萩原恭男校注、岩波文庫、岩波書店（一九九一）

この記載のあと、越前吉崎には、吉崎の御堂という一向宗東西の道場（この記載でみる限り、『菅菰抄』の書かれた十八世紀後半には、まだ「吉崎御坊」という名称は使われていません）があり、南の山を蓮如山といい、花瓶の松（「蓮如上人御手植の御花松」に相当）という名木があるなどの記載があり、汐越の松についてもその所在が説明されています。

この引用文にある「加賀吉崎」と「越前吉崎」が、今はどうなっているのか気になりましたので、国道三〇五号線を歩いてみました。すると、亀甲に「舌鼓」という看板のかかった石塚醤油店の先に、誂え向きの道標を見つけました。

石川県加賀市吉崎と福井県あわら市吉崎

まず石川県加賀市の道標（写真右）。石川県加賀市の吉崎である証拠は、写真では見にくいが、奥の信号の表示が「吉崎」になっています。信号の手前の右手に見える寺は、石川県加賀市吉崎の名願寺です。この門前にある三叉路（鹿島の森と塩屋町への一一七号線の分岐点）を示す道標の柱にも「加賀市吉崎町」の表示板が貼ってあります。

この写真手前右側に裏側になっている道標が福井県あわら市の道標です。振り向いて、これを表側から撮ったものが紙面左側の写真です。福井県あわら市の吉崎であるのは、左側の支持柱の住所表示が「あわら市吉崎二丁目」となっていることでわかります。紙面左右に示した二つの道標の真ん中が石川県（加賀）と福井県（越前）との県境というわけです。確かに、現在でも『菅菰抄』に記載されているとおりに、吉崎は二つに分かれていました。

北潟湖と風車

宿を福井にとったので、一二時五二分発のバスで吉崎をあとにし、ＪＲ芦原温泉駅まで戻りました。三時間弱のあわただしい訪問でしたが、大体予定していたところはめぐりました。帰りのバスの中から、風力発電の風車の列が見えましたので、写真に撮りました。風車の列を見て、東北大地震の津波による原子力発電所の事故を連想し、福井県の若狭地方は、日本一の原発密集地であることを思い出しました。事故の連鎖がおこらなければよいがと、憂鬱な気分になりました。蓮如上人の時代から五百年余りの年月が経った今は、同様の混乱の時代が始まろうとしています。時代の閉塞感と将来への不安が、原発事故を契機にとめどもなく広がっています。

プロフィール
藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（番外一）2011/11/13
© 2007, 2008, 2010, 2011 藤田眞作 http://xymtex.com